



高田教授が改修設計に携わったNEXT21の住戸で
吉村さんがつくったガス囲炉裏テーブルを囲んで

Story 1 グループトーク
まちなかのプロフェッショナル

人とモノを結びつける手仕事・ものづくりと まち暮らしのこれからへ

商工都市・大阪のDNAを受け継ぐ ものづくりと職人さん

岸本 「上町台地 まちなかのプロフェッショナル〜暮らしによりそう手仕事・ものづくり・まちづくり」の取材に同行させていただきました。タイトルどおり、まちのことやいろんなことに目線を向ける職人さんたちばかりで。人生のお話まで伺えて、職人さんの背景にも気づかされました。吉村さんとの出会いも衝撃的でした(笑)。

以前はそんな人がもったいたように思いますが、そのDNAが、まちのなかにまだ残っていることにも気づかされました。ただ、みなさん厳しい状況にあるの

も確かで、そこを打破する方法を、みんなで考えていければいいですね。

高田 大阪のものづくりの特徴の一つは、伝統産業というより、近代化・工業化が進むプロセスのなかで、金属をはじめとする様々な材料を加工する手工業が生まれ、これに関連する多様な手仕事が発展してきたことです。最先端の工業製品でも手仕事に頼っている部分がある。もう一つの特徴は、商業と結びついているところ。「商工」融合という面白味を感じます。これに関連しては、吉村さんのようにコミュニケーション能力がとにかくば抜けて高い職人さんが大阪にはおられますね。

吉村 そんな風に思われるのは、ぼくの育ちのせいかも。父が古道具を扱う仕事をやってましたので、古いものを大事に使い続ける気持ちは、それで身に付いたのかもしれません。

それと下町育ちで、近所の人たちも家族同然な、世話焼きの多いまちでした。だからか、ぼくも困った人がいたら放っておけない。ものづくりの相談には乗るし、ぼくが近所の工場へ相談を持ち込んで、いっぱいアイデアが集まってくる。みんな、「このまちで、つくれんもんはない」という自負があると思います。

それに、困ってはる人が喜んでくれたら、自分もうれしいです。

高田 サラリーマンだとなかなかそうはならないし、農業でもそうはいかない。職人さんたちの、生業とライフスタイルの関係にも興味が湧いてきますね。

地域で生まれ、地域で育ち、 垣根を越えて、アイデアを持ち寄る

吉村 ものづくりの世界には壁がないです。金属だけ扱ってれば良い、同じモノをつくってれば良いわけでもない。いろんなモノを扱い、

いろんな注文に応じる。それには分野を超えて付き合っ、アイデアを持ち寄らんとアカン。

地域で生まれ、地域で育つ。すると自然に地域へ目が向くようになってくるし、そうなる地域からも求められる人になる。それに、いろんな人から頼ってもらえると、「よっしゃ、やってやる」と自信や意欲も湧いてきます(笑)。

岸本 うちのまちも家族の範囲がよく分からないところで(笑)。お店やものづくりをやっている家が多かったのですが、子どもの頃を思い出しても、どこも出入り自由というか、敷居の低い家ばかりでした。家とまちの垣根が低かったのでしょうか。そういうまちって、私にはとても居心地がいい。子どもたちにもきっと居心地がええんと違うのかなあ。

それと、私の場合は「まちのため」というより、「巻き込まれている」だけやと思います。持ち込まれる話をいちいち聞いてしまう。すると対応せんとアカンようになる(笑)。

高田 いえいえ、マルゼンボタンギャラリーでの「まちなかの職人展」では、他業種とのコラボレーションを積極的に展開され、岸本さんは他の人を十分巻き込んでました(笑)。たとえば、靴屋さんと一緒にハンサムバッチを作る発想、岸本さんのオリジナルティが光っていました。

岸本 ダメ元でとりあえず聞いてみるというのはよくやります(笑)。何か相談を受けたとき、それをまた誰かに相談すると、つながったり、上手くいくときもありますし。それで喜んでもらえると、吉村さんと同じようにうれしいです(笑)。



NEXT21/U-CoRo ウィンドウ・エキジビション13
「上町台地 まちなかのプロフェッショナル」の案内フライヤー



岸本さんが主宰する「マルゼンボタンギャラリー」で開催された「まちなかの職人展」(2011年10月)。U-CoRo で使われた職人さん紹介パネルも再展示され、会場では演奏会などの様々なコラボレーションが展開されました

人の心に響く手仕事品には、人とモノを結びつける力がある

高田 このNEXT21・304住戸「住み継ぎの家」にも、大阪格子の建具やガス囲炉裏テーブルなど、大阪の職人さんと一緒につくったインフィルが入っています。住まい手が「いつまでもそばに置き続けたい」とか「引っ越し先へも持っていきたい」と思うかどうか、また、これらを媒介にして来客との会話が弾むかどうかなどを見ていきたいと思っています。

実は、吉村さんにつくってもらったガス囲炉裏テーブルは、ステンレスを使って一旦完成していた。でも、吉村さんは銅でもう一度作り替え、こんなに味があるコンロになった。技術だけではなく思いが詰まっているんです。

吉村 実用性と遊びのバランスと言いますか、何やしっくりいかんもんは出せませんし、銅のほうが使っているうちに変化も楽しめる。モノをつくるにはそんな遊び心も大事ですね。

それと、職人さんが思う存分モノをつくっているとところを見せる。そんな展示ができないとかか、「U-CoRoにぴったりな、こんな人もおるでえ」と思ったりしています。



高田光雄さん

高田 岸本さん主宰の上町台地・職人研で、吉村さんに案内してもらった生野区の町工場で見たとへう絞り職人の技にも感銘を受けましたね。あの技を、われわれの生活空間のもっといろんなところに使えないものかと思っています。

吉村 モノをつくる技術だけでなく、アイデアを集める技術もなくなっていきような気がします。でも、今はインターネットで世界中とつながっていて、それを使いこなせる人たちはアイデアも行き来させることができているのかも。岸本さんたちの世代もそうですね。

岸本 まわりにはいると思いますが、私もインターネットはあんまり使いこなせていません(笑)。

上町台地・職人研が主催した生野の職人さんめぐりにU-CoRoも協力(2011年8月2日開催、上町コロコロ新聞)



高田 お二人とも、使えなくてもつないでいる(笑)。大阪はお二人のような「つなぐ人」がもっと必要なのだと思います。

吉村 「生野・東成ものづくりフェスタ」などは、つなぐ場のひとつになっています。

暮らしによりそう技や知恵を まちのなかで支えていきたい

岸本 手仕事品を求める消費者が減ったことと、担い手の不足も課題ではと思います。それらを、分野ごとに考えるのではなく、まちのなかで解決していくことができなかなと。ものづくりの世界を、代々家業としている人以外に、新しい人も入って来られる環境にしていくことも大切ではと感じています。

「まちなかの職人展」のときには、U-CoRoでも展示された職人さんのマップを面白がってくださった人が多かったのですが、「こういうことでも、まちのことを伝えていけるんやなあ」と思いました。

それと、建築に少し関わっていたので思うのですが、現代建築でもちょっとずつ中身を変えながら住み続けていく。そんな暮らしが今もできるのではと思っています。

高田 職人さんの紹介パネルも、U-CoRoでの展示のときは、雰囲気違って見えました。小売の場で展示すると、「次はこれが欲しいなあ」と購買意欲につながる可能性もあるように思います。



吉村健一さん

食い道楽の大阪では、本当は食べ物系ものづくりが特徴的ですが、逆に食べもの以外の生活関連分野に的を絞って紹介してみてもいいでしょう。U-CoRoで採り上げた職人さんは、知っていそうでよく知らない分野ばかり。なくなれば思い出せない、忘れられてしまう仕事というのにも意味がある。また、そういう分野とのコラボレーションを岸本さんに進めてもらうことで、ものづくりの技を保全しながら活かしていくという手もあります。

つくる人、活かす場、 つなぐ人が出会う仕掛けに挑戦を

吉村 岸本さんのビルの看板を手掛けさせてもらっています。その看板に木でつくったボタンを掛けたいということで、頼める人を探していたら、近くの職人さんを思い出した。こんな風につながっていくと楽しいですし、いろんなことに口出ししていくようになる。そのうち、岸本さんとこの家族のことにまで口出しするようになるでえ(笑)。

岸本 うちのまわりもまだそんな感じです。お節介と言うのか何と言うのか(笑)。

こうして出会った職人さんたちと、もっと一緒に何かをつくっていければなあと思います。ああでもない、こうでもないと言いながら一緒につくっていく。

吉村 たとえば身近な公園の遊具を地域の職人さんたちのアイデアを集めてつくるとか、まちのなかにはもっと可能性があるはずですよ。

高田 つくる人がいても、その良さを知って、活かしていく機会や、つないでいく人がいないと、ものづくりは続かない。U-CoRoも、そんな場になるよう、もう一歩踏み込んだ仕掛けに、挑戦してみても良いのではないのでしょうか。



NEXT21・304住戸「住み継ぎの家」に置かれているガス囲炉裏テーブル。銅製の囲炉裏は吉村さんによるたたき仕上げで、味のある楕圓目が付けられている



岸本知子さん



岸本さんがマルゼンボタンギャラリーで提供するボタンのスティックチョコは、U-CoRoの「まちなかのプロフェッショナル」取材がご縁で訪れたエクチュアさんとの共同企画



とこしえ秋まつりの余韻が残る高津宮を訪ね、社務所にて

子どもへ、大人へ、 まちなかの気づきの「場」から未来へ

まちで子どもを育むことへのアプローチ

富士原 天王寺区の五条地域で活動しています。夏祭りをみんなで復活させたり、地蔵盆再興のお手伝いなどもしてきました。

地蔵盆などの地域行事が私の若い頃に衰退してきました。自分たち大人が生活に追われるようになって、地域のことまで思いが向かなくなったことが大きな原因のように感じています。生活は豊かになったのに、何か余裕がなくなったのかなと。

近年も変化は続いています。例えば、以前は「子ども」と言えば小学生でしたが、塾通いも増えてきたこともあって、最近は就学前の子になってきました。夏祭りの神輿も、今年は子どもの担ぎ手が集まらず、

開催日 2012年11月1日(木)
開催場所 高津宮社務所

語り手
小谷真功さん(高津宮宮司)

富士原純一さん
(五條宮奉賛会青年部/有限会社富士原文信堂代表取締役)
郭辰雄さん(特活)コリアNGOセンター代表理事)



五条地域(天王寺区)の大人と子どもが地元の五条小学校に集まって、毎年8月23、24日に盛大に行われる將軍地蔵尊の盆踊り

とうとうクルマに乗せて、巡行しました。

小学校での案内ビラ配りも、「宗教行事では」といったクレームが一部の親から入り、できなくなりました。宗教行事というより子どもの集まりなのですが、マンション内でのポスター掲示や回覧板での案内も、マンションやその住民が町会に入っていないのでむづかしい。街角の掲示板にポスターを貼りますが、それだけでは効果薄です。

そこで最近、氏地を越えて、周辺にも声を掛けていく。そして、大人も楽しめるようにして、親が子どもを連れてくるようにする。そこで神輿を見せて「担げるよ」と持ちかける。そんなことを企みはじめました。そもそも子どもは減っていくので、大人向けの夏祭りや地蔵盆という発想も大切かもと思ってきました。

小谷 ご縁あって25年前に高津宮(中央区)へ参りました。神社にはいろんな方が来られます。若い頃から福祉に興味があったのですが、神社では本当に幅広く社会福祉を考えていくことができます。

子どもたちにも何か関われないかと考えていたのですが、富士原さんのご指摘どおり、現代っ子は遊ぶ間もない。そこで思いついたのが、神社で1泊する夏休みの宿泊体験です。たった1泊2日ですが、今の子どもたちが苦手な集団生活を体験し、TVゲームや携帯電話も持ち込み禁止にする。そして、いろんな大人に出会ってもらい、手づくりのお土産を持たせて帰らせる。そうした体験を子どもたちが将来、何かのときに気づいて、活かしてくれればという思いがありました。

1年目は黒門市場でマグロの解体見学や、ご近所の居酒屋さんのご主人の料理教室。2年目は国立文



高津宮で毎年行われている、1泊2日の夏休み宿泊体験に参加した子どもたち。気づきや発見の場を子どもに与えたいと、小谷宮司の発案で数年前からはじめられた

楽劇場の舞台裏見学。NEXT21へ見学にお邪魔したこともあり。地域のみなさんやボランティアなど、大勢に支えていただけて成り立っています。

郭 私が活動していますコリアタウン界限(生野区)にも、高津宮と同じ仁徳天皇を祀った御幸森天神宮があり、その歴史は朝鮮半島と日本の長い交流の証しでもあります。上町台地にも半島との長いつながりを表す歴史文化がたくさん残っていますが、その上町台地とつながることで、学びの視点が広がりました。その後、韓流ブームもありまして、文化を通じてこれまでなかなか越えられなかった垣根を、越えてきつつあるなと感じるようになってきました。

しかし、在日コリアンの9割は日本名、通名で暮らしていますし、日本人の子どもたちも友達が在日コリアンとは気づかない環境で、暮らしています。

そこで在日コリアンの子どもには自分たちの民族文化を伝え、アイデンティティを持ってもらう。日本人の子どもには、そうした他の文化やアイデンティティを理解してもらう。そういう「場」をつくり、いろんなモノを持ち込んで、混ぜていく。そう考えました。今では年間8~9千人が体験学習プログラムに参加して、ハングルを学び、キムチをつくり、チャンゴを習う。文字通り、コリアタウンを「場」として捉えて、高津宮の宿泊体験のように気づきや発見を得てもらおう。それが、私たち大人の役割かなと思います。

子どもを育むための“まち”の継承

郭 ここ数年は韓流ブームなどもあって、在日コリアンやまちを取り巻く環境も大きく変わってきました。コリアタウンへ来る人も随分と増えてきました。人が増えるとまちも変わってきます。新しい店も次々出て、まちに活気も出てきます。今では店主も世代交代が進み、若い世代が頑張っています。



富士原純一さん

富士原 コリアタウンのエエところは、韓流ブームがプラスに作用し続けて、2世や3世がそれにしっかり対応していることかなと、郭さんのお話を伺って思いました。

天王寺区も人口は増えても、生まれ育った人は出ていく。住むには良いところかもしれないが、まちの伝統としてはどうでしょう。子どもたちがそこに根付いてこそ、まちは続く。そのためには故郷意識を持ってもらって、大人になったら、このまちで子育てしたい気分させる。まちの持続のためにも、そうならないかなと願って、次世代の育成と世代交代にも努めています。郭さんたち 코리아タウンの動きを見習って、五条でもつなげていければと思います。

郭 コリアタウンでもさまざまな葛藤があったのですが、在日コリアンにも「ずっとここで暮らしていくんだ」という気持ちがあった。そのことが、日本人と一緒にまちのことを考えていくという気運につながったと思います。

小谷 このあたりもマンションが増えていますし、地域社会とつながっていないようです。私も単にお宮でイベントをしている訳ではなく、神社を通して、まち

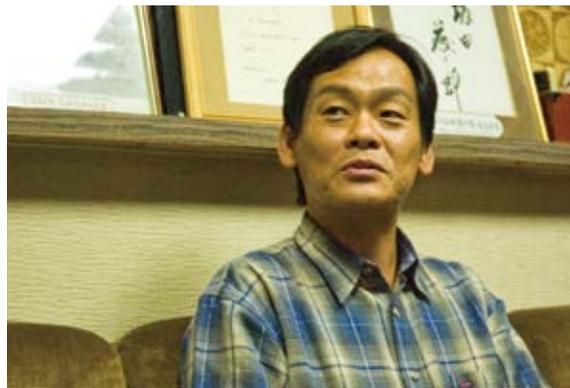
へ入ってくる人たちとも交流できたら良いのになあという思いがあります。

地域の変化だけでない、 子どもの変化、親の変化

富士原 私たちが子どもの頃にはいろんな遊びがありました。ベッタンにビー玉、あれ、賭け事ですね。そんなのが普通やったのを、いつの間にか大人が封じ込めてしまった。木登りしていたら「危ない」と怒る。怒られるから子どももしなくなる。昔は怒られてもしていたのに。それでは子どももひ弱になるはずですよ。

郭 コリアタウンも昔はよその子どもも怒るまちでしたが、最近はその感じではなくなってきましたね。でも、まだ何とか誰がどこの子かは分かる。つまり、親と子のネットワークのようなものはまだあるかなと。マンションも増えたとは言え、よそに比べるとまだまだ平べったいまちです。でも、いつか変わってしまうかもしれませんね。

富士原 まちのなかで「あつ、誰々のオッチャンや」という目があると、子どもはとても悪いことはできないもの。でも、現在ではそういう関係も見えなくなっています。何かのキッカケで親を見て、子どもを見て、「ああ、やっぱし」ということも多い。



郭辰雄さん



御幸通商店街(コリアタウン)一帯で、毎年11月に開催される、生野コリアタウンまつり



コリアタウンで修学旅行生などを対象に実施されている体験学習プログラムのキムチづくりの様子。このほか、ハンゲルやチャング演奏などを習う内容で、年間8~9千人が参加する

小谷 高津宮での宿泊体験も、単にお子さんを預かるイベントではないのですが、そういう感覚の親御さんがいらっしゃることもありました。

富士原 一方で最近では、高校や大学の入学式や卒業式に親が付いてくるそうで。そのうち、高津宮の宿泊体験でも、一緒に泊まる親の部屋がいるかもしれませんよ(笑)。

これからの活動と そこでのU-CoRoの役割・可能性

郭 私たちがやりたいことはコリアタウンや生野の「場」としての活性化です。体験学習プログラムや「生野コリアタウンまつり」などを軸にしながら、つながりは大きく広げていきたいと思っています。そのためには、地域と地域のつながりも大事であると思います。U-CoRoにはそのつながりづくりや情報提供を手助けしてもらえればうれしいですね。

富士原 年齢とともに動きが鈍くなってきて、これからできることを考えていくなかで、ビー玉などの昔の遊びや伝統を子どもたちに教え込む、そんなことができへんかなと思いはじめています。

小学校でも昔の遊びを教える機会がありますが、地域のオッチャンが教える。それもコソコソと遊ぶような(笑)。見つかったら怒られるというようなドキドキ、ワクワク感。ディズニーランドでは体験できないようなことを伝えていきたいですね。U-CoRoでそんな

なコソコソ遊びを子どもに教える手助けをしてもらえませんか(笑)。



NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション10「まちで育む上町台地の子」の関連イベントとして開催された「音とトークの愉快なセッション 子どもたちに伝える、上町台地の大人力! 生命力!」では、大池中学校PTAおやじバンドを筆頭に元気な大人たちが集合しました(2010年5月16日開催、上町コロコロ新聞)



小谷真功さん

小谷 子ども神輿も復活していますが、太鼓か獅子舞の復活もしたいですし、季節ごとの祭りを通じて伝統をつないでいくことと、みんなで一緒に楽しめる機会、餅つき大会や宿泊体験を続けていきたいです。新しい秋祭りも生まれました。氏地や氏子さんを大事にしながら、より多くの人たちとつながっていける機会を設けていきたいです。U-CoRoにそれを手伝ってもらえると助かります。

富士原 高津宮やご関係の方々ぜひ交流したいですね。地域や神社同士でつながっていく仲立ちを、U-CoRoでやってもらうとか。

小谷 神社同士が協力し合って、社会貢献していくのも良いですね。仁徳天皇と言えば王仁博士ですが、その碑があります御幸森天神宮ともつながりたいですね。

郭 御幸森天神宮とつながってもらえますと、コリアタウンと上町台地の結びつきもより重なります。上町台地とは無縁ではないと、つながりを深めていくにつれ、感じています。

小谷 一足飛びにはいかななくても、互いに無理せずちよつとずつ進めていきましょう。





六波羅さんが改修設計を手がけたお屋敷再生複合施設「練」の中庭にて

まちの暮らしと川は 切っても切れない関係

オダギリ U-CoRoでの「上町台地・水先案内」展のために川跡をたどった猫間川へ、このあいだも行ってきました。

六波羅 猫間川の跡は空堀商店街界隈（以下、空堀と略）と緑橋の町家再生施設「燈」のあいだを行き来するときに、いつも通っているなあ。

オダギリ 川跡を追って歩いていたとき、「ここが川筋やと思うんですけどね…」と同行者に話していたら、近くにいたおばあさんが話しかけてきて。そのおばあさんが猫間川の川跡を覚えているはったんです。それで、川跡がまたハッキリしました。

六波羅 昔は川がもっとそばにあって、暮らしにも近かったようなやね。東横堀川から空堀は少し、意識としての距離感があるように思います。今は高速道路

の高架下になってしまっているけど、お年寄りに話を伺うと、東横堀川との距離感ももっと近かった。

まちのなかにそういう距離感の近さの痕跡が今も残っています。例えば、商店街から少し離れた小さな裏通りの通称が、現在では考えられないような名前だったりします。何でそんな名前かと言いますと、長屋街から出る生活雑排水を川まで運び出す道だったかららしいです。

大阪ではまちの暮らしと川は、ずっと切っても切れない関係で、今もその名残をまちのあちこちに見つけることができますね。

オダギリ 大阪の観光を仕事にしている関係もあって、水辺にはしょっちゅう来ています。特にリバー・クルーズで案内もしていますので、発着地でもある道頓堀川は身近です。

東横堀川も船でよく通りますが、この辺（末吉橋）ではご覧のような風景で、「大阪のパルテノン神殿です」って案内しています（笑）。それでも「あれが何とか橋です」とか言ってはいますが。

川と暮らしの関係を見つめ直す 空間利用を

六波羅 川沿いの緑の有効利用をもっと進めたいですね。末吉橋の袂にもちよとした空間があるのに、フェンスで囲まれたりして使えない。花見もできそうな良い桜並木があるのに、近寄れない。

オダギリ 東横堀川も本町橋から北のほうは、水辺もだいぶ良くなってきたのですが、少しずつでも良くしていってもらえれば良いですね。

川も毎日眺めていると変化があります。今年の夏は道頓堀川で小さな藻が大発生しましたが、そんな川の様子から「いろ

んなエネルギーが流れ込んでんねんなあ」と感じます。

道頓堀川も日本橋あたりをどうも境に、海水と淡水がせめぎ合っているようなということも、川のなかを泳ぐ魚の様子からうかがえます。戎橋のあたりではボラをよく見かけますが、東横堀川に入って末吉橋あたりでは鯉をよく見るようになります。

夕立のときには川の水位も見る見るうちに上がりません。今年の夏も水位が急に上がるがありました。

緑も人の暮らしも 基本は陽当たりと風通し

六波羅 お屋敷を再生した「練」がオープンしてから、2013年の春で10年になります。改修前の「練」は木々も伸び放題、生え放題。陽もあまり差し込まず、葉っぱにもほこりが積もっているような状態で、「さあ、どないしようかなあ」と（笑）。

雑木や雑草を刈り取り、枝を払ったりしていくうちに、緑も元気を取り戻していくような感じで、それまで花が咲いたことなかった木に花が咲いたりとか。

ぼくらは試行錯誤の連続でしたが、陽当たりも良くなって、他の木が元気になりました。今も「この枝を払おうか」などと考えながら、手を入れ続けています。基本は陽当たりと風通し。人の暮らしと同じですね（笑）。

緑があると良いことがいっぱいあります。季節を感じることもできますし、緑を目当てに鳥たちもやってくる。それに緑を支える地面があると、夏でも風を少し冷たく感じるすることができます。

まちなかの小さな水と緑のスポットが 気づかせてくれること

開催日 2012年9月13日（木）
開催場所 中央区の空堀商店街界隈など
（水と緑のスポットをめぐるながら）

語り手
六波羅雅一さん（六波羅真建築研究室代表）
オダギリサトシさん（㈱インブリージョン ツーリズムプロデューサー）



かつて上町台地の東縁に沿って流れていた猫間川、暗渠となった今も、その痕跡が各所に残されている（写真は東小橋北公園にある「ねこまがわ」のオブジェ）



末吉橋から東横堀川の川面をのぞく。上には高速道路が川面を覆うようにして走り、橋脚が立ち並ぶ



オダギリサトシさん

オダギリ 上町台地で育っていますが、緑をあまり意識してこなかったように思います。ただ、「谷町筋と言えばセミ」というイメージがあることを思い出しました(笑)。今夏もそうですが、うるさいくらいに鳴いている。でも、緑を感じない道頓堀や阿倍野界隈では、セミの声も聞かないですね。上町台地はセミ・ワールドでもあります(笑)。

ぼくが9年前に「練」の一角で独立開業した「上町貸自転車」の最初のフライヤーには、「練」の前の植栽を写し込んでいまして、自分のどこかで緑に惹かれるところもあるのかもしれない。

U-CoRoの「コミュニティグリーン紀行」でも天王寺界隈を歩きましたが、そのときの下見の折に、大阪教育大学附属天王寺中高校のところの緑が良かったん

ですけどね。本番のまち歩きの際には、残念なことに伐採されていました。

六波羅 水もそうやけど、緑も普段の暮らしのなかで接する機会を増やさないといけないのでは。手入れは大変やし、落葉樹は近所迷惑だと言われるし、やっかいなことだらけなんやけど、それでもあったほうが良いはず。

水やりも「練」では自動散水に替えました。確かに一手間省けて楽になったんですが、その代わりに、緑に目があまり向かなくなりだして、気がついたら木が弱っていたりする。自動散水でも夏は1日2回散水にしたり、1回あたりの散水量を天気に合わせて調節したり、それなりに気は遣うんやけど、むずかしいところです。

まちなかの再生施設を緑でつなぐ

六波羅 「練」と「惣」、「萌」の三施設では、緑化の取り組みに国土交通大臣賞をいただきました。「この三施設を拠点に、何かつなぐ試みができないか」と考えたのですが、そこで浮かび上がったのが「緑化」で、「三施設を同時に緑化させたら、インパクトがあるなあ」と。それもただの緑化ではなく、それぞれオーナーの想いがこもった建物に、来る人の目を向けてもらう意図もありました。

それ以前から、「惣」の屋根を何とかしたいという思いもあって、それを屋根上緑化でカバーする。「萌」は

敷地内に空き地がなかったので、道路に面した前面を壁面緑化する。そんな大胆な発想が浮かびまして、実現可能性を探っていくと「何とか、できそう」(笑)。「練」の植栽も手入れ直して、三施設同時緑化ができました。

オダギリ 「惣」の屋根は、歩いていても確かに目立ちます(笑)。

六波羅 「蔵」では庭の再生も一緒にやりました。蔵の上に雨水をためる桶を置いて、庭には水琴窟を入れ、水と緑と一緒に楽しめる工夫をしました。水琴窟の横には瓶を置いて、その水を柄杓ひしやくに汲んで、水琴窟の上に垂らすと音が響く仕掛けにしています。

小さくても身近な水と緑を増やしていきたい

六波羅 桃園公園のそばにも、昔は池があったそうです。その池のほとりに観音さんが祀られていて、それで公園東側の坂道を観音坂と言うらしい。公園にも池があれば、水と緑でええねんけどねえ。危ないとか、そんな話になってしまうかなあ。

オダギリ 四天王寺の極楽浄土の庭を見学させてもらったときは、「ええ庭やなあ」と思いました。緑もキレイし、池もアクセントになっていましたし。

自宅でも玉造黒門しろろり越瓜を育てていますが、水やりや手入れはぼくがしています。実はそういうのが苦手で、小学校の夏休みもアサガオの世話がイヤでした(笑)。そんなぼくが世話をしているのは、まだ小



六波羅雅一さん

さい子どもに任せると、水やりと言えば水遊びと一緒に意味になる。それなら自分でやった方がまだましと(笑)。こういうのも、いい経験になります。

六波羅 小さくても庭があるほうが良い。庭があれば緑のために水がいる。だから建物のどこかで水を貯める工夫をする。そう考えていけば、身近なところでもっと水と緑が増えていくのではないのでしょうか。小さな部分からでも、忘れ去られていたまちの歴史や自然を思い出す。U-CoRoを通じて、そんな工夫や意識はできそうですものね。

長屋再生複合商業施設「惣」は屋根上緑化され、まるで草屋根のよう



複合文化施設「萌」の壁面にも多種の植物が繁茂し、建物を包み込む



まち歩きの最後は、上町台地の水でつくった銘酒で乾杯

デイセンターとして活用されている「蔵」。屋根の上には雨水を貯める桶があり、庭には水琴窟が備えられている



Story 4 グループトーク
「ツルつなぎ」プロジェクト

玉造黒門越瓜復活の地、玉造稲荷神社参集殿にて

しろり 越瓜をつなぐ、越瓜がつなぐ上町台地

開催日 2012年11月2日(金)
開催場所 玉造稲荷神社参集殿

語り手
森下正博さん(なにわ伝統野菜応援団員)
鈴木伸廣さん(玉造稲荷神社禰宣)
中越慈子さん(五条地区住民、「ツルつなぎ」プロジェクト参加者)

「ツルつなぎ」プロジェクトがつないだもの

鈴木 「玉造黒門越瓜栽培“しろり”プロジェクト」を改めて振り返らせてもらいますと、「よう、こんだけ、広げはったなあ」と驚きますね(笑)。越瓜復活の活動をはじめた頃は、神社や玉造という地域がまずはあったのですが、それをU-CoRoが上町台地全体に広げてくれはって。南は天王寺まで、東へも随分遠くまでタネを配ってもらって。ここまで行くとは、正直思いも及ばなかったですね。越瓜にも少しはご恩返しができただかなと思います。

森下 なにわ伝統野菜では玉造黒門越瓜とのお付き合いが一番長くて、一番薄いです(笑)。どの野菜でも私の関わりは薄く薄くと思って、



NEXT21/U-CoRo ウィンドウ・エキジビション05
「上町台地となにわ伝統野菜物語」展示に合わせ、玉造黒門越瓜を栽培するプロジェクトが2008年春から開始。この年から発行をはじめた上町コロコロ新聞は、玉造稲荷神社での越瓜食味祭の様子や各地での栽培情報などを紹介

お手伝いさせていただいています。それは、現場や地域のみなさんが動きやすいようにとってのことです。

越瓜はタネ配りからはじまって、地域で育てて、みんなで食べて。表現は変ですが、ちゃんと看取っている取り組みでもありますね(笑)。

「ツルつなぎ」というネーミングも気取りがなくて良いですね。何やよう分からへんけど、フツと参加してしまいそうな、そしてタネも配りやすそうやなと思います。

それとU-CoRoの上町コロコロ新聞も参加者の楽しい雰囲気が伝わってくる媒体ですね。越瓜の取り組み方は、他地域で伝統野菜を採り上げていくときの見本になると思います。

中越 今年も「ツルつなぎ」プロジェクトに参加させてもらいましたが、毎年、越瓜の収穫がU-CoRoの収穫祭よりあとになってしまいます(笑)。「何がアカのやろ」といつも思いながら、工夫してはいるんですが。越瓜料理は収穫祭のときのメニューを参考につくって、食べています。

最初の年はタネから芽も出ずで、苗をあとから持ってきてもらって、育てました。そのときも収穫は遅かったのですが、大きい実が付いて、美味しくいただきました。

生き物を育てるむずかしさと言いますか、花の元気さ。毎年そういうものを越瓜から教えられたり、もったりしています。

鈴木 ボクも最初は越瓜のことを何にも知らずで。それで森下先生にご相談したのですが、先生は「まずは楽しみなアカン」とおっしゃって、つくる楽しさ、つくることを楽しむことを教えていただきました。「ツルつなぎ」に参加されている方もみなさんホンマに楽し

そうで。先生がおっしゃっていたことが伝わっていると思いますね。

森下 私も実は、越瓜を我が家のプランターでうまく育てられたことがなくて(笑)。今年をはじめて実ったんです。みなさんの前では偉そうにしながら、毎年、「何で育たへんのやろ?」と悩んで悩んで。土を替えたり、いろんな手を試してはいるんやけど、上手いかなくて。まあ毎年、見るも無惨な状態です(笑)。

鈴木 先生にいただいた手書きの育て方マニュアル。まだ持ってますから、コピーして差し上げましょか(笑)。

森下 NEXT21の屋上、長屋の中庭、マンション、幼稚園といろんなところで育ててもらっている。そういうことも含めて、「ツルつなぎ」はホンマに大阪らしい取り組みですね。

大阪らしいと言えば、「ツルつなぎ」の参加者が集まる夏の収穫祭。栽培体験を話したり、料理を作って食べてもらって、その料理のレシピはもちろん、いろんなことを伝えあう場になっている感じがします。

中越 料理だと「さしすせそ」というような、これが大事ですよということがありますよね。でも、本当はどれくらい砂糖や醤油を入れたら良いのかとか、分かりにくいですね。

森下 越瓜の育て方でも、水やりはいつ、どれくらいの量をやれば良いのか分からないとか。水やりの回数や水量などは、どんな場所でどれくらい育てているかといったことで違ってくる、デジタルではなくアナログな情報ですよ。それが収穫祭でやりとりできる。



NEXT21/U-CoRo ウィンドウ・エキジビション08「上町台地 玉造黒門越瓜「ツルつなぎ」プロジェクト」で展示した「玉造黒門越瓜栽培カレンダー」パネル(玉造稲荷神社の鈴木さんから提供いただいた資料から作成)



NEXT21の屋上などで越瓜や勝間南瓜などのなにわ伝統野菜を子どもたちが収穫(2009年7月26日、上町コロコロ新聞)

それと、みなさん、育ったかどうかということよりも、「今年は何で上手く育ったんやろう?」とか「何で芽が出なかったんやろ?」ということをおっしゃる。結果よりも「何でやろ?」ということを大事にされている。「今年はおカンわ〜」と言える大阪のまち。そういうまちの感覚が、“ツルつなぎ”プロジェクトにも良い形で表れていると思います。

中越 上手く育たなくても、先生がおっしゃるように、それでも楽しんでいる面はありますね。育たなくても、収穫祭で越瓜料理を味わうこともできますし。春になると「そろそろ、越瓜のタネが届く頃だなあ」と思うようになっていきますし。

森下 そんな風に、「越瓜の時期やなあ」という感覚がまちの人に共有されていていっていることも、“ツルつなぎ”プロジェクトの効用の一つですね。それは毎年続けているというスゴさが背景にあつてのことですね。季節感を知識としてではなく、越瓜を育てるということを通じて、身体で覚えてもらっている。それと、育っていく過程を追うことで、みなさんの日常の一コマを切り取っていますね。

越瓜の活動では、玉造稲荷神社の存在も大きいと思います。夏祭りでの食味祭も地域の楽しみですよね。上町コロコロ新聞も食味祭を採り上げてくれていますが、「そろそろ祭りやなあ」といったことを地域へ自然と意識付けしている。そう働きかけていると思います。

中越 いつも食味祭のご案内をいただいているのですが、地元の五條宮の夏祭り



森下正博さん

と重なってしまつて。でも、一度行ってみたいですね。

越瓜が育む、人の個性

鈴木 小学校では越瓜を、ドッジボールとかで活発に遊んでいる子ではなく、あまり活発でない、一人で本を読んでいるような子が育ててくれていたりします。そんな子も、越瓜を育てることで活躍できる場が生まれる。「オマエ、すごいなあ」と言ってもらえる。

森下 越瓜もそうですが、子どもも一人ひとり違いがあります。個性に応じて向き合っあげないといけません。越瓜を育てるようなことも小学校に採り入れてもらえると、ドッジボールや勉強だけでなく、先生が子どもを見る新たな目ができますね。越瓜だけでも、



中越慈子さん



玉造黒門越瓜栽培“ツルつなぎ”プロジェクトは栽培から収穫、そしてみんなで食べるところまでが一つの流れ。収穫祭には手づくりの料理が持ち寄られ、大きなテーブルもいっぱい(2009年8月9日開催、上町コロコロ新聞)

それを育てるのが上手な子、料理するのが上手な子と、いろんな役割をそれぞれに担うこともできます。

鈴木 野球で言えば「エースで4番」はいないということですね。足の速い選手、守備の上手い選手、いろんな個性があつてチームになっている。

森下 そのとおりです。いろんな選手がいてよいのです。それぞれが得意なことで越瓜に関わることで、「アイツ、すごいことできるんやなあ」と思ってもらえる。

“ツルつなぎ”プロジェクトと上町台地のこれから

鈴木 継続が一番大事でしょうね。私自身も、これまで100年間廃れていた玉造黒門越瓜が、100年後もこのまちにあるようにしていきたいです。そのためにも継続が一番大事だと思っています。それと、マンションに住んでいる方やこの地に根付いていない人たちと、一緒に取り組んでいければ良いですね。



鈴木伸廣さん

玉造黒門越瓜栽培“ツルつなぎ”プロジェクトは2010年以降も継続され、毎年収穫祭を開催。ツルつなぎの輪は年々広がっています



2010年8月28日



2011年8月20日



2012年8月11日

中越 私自身はまだまだ受け身での参加で(笑)。でも、いつもほんとは楽しく参加させてもらっています。頼まれてもいないのに「観察日記」まで付けてしまつて(笑)。まるで、子どもの頃のアサガオの観察日記のようです。

それと近所の友達にも勧めていきたいですね。私が住んでいる千日前通より南の上町台地にも、育てている場所を増やしていきたいと思います。

森下 越瓜に関わる人たちを見ていると、大阪はやはり「民の文化」だと思いますね。“ツルつなぎ”プロジェクトのように、心から楽しめる取り組みを続けてもらえればうれしいです。そして越瓜と一緒に、文化性や地域への愛着なども育てていってもらえると良いですね。もちろん越瓜キャラクターの「くろもんちゃん」にももっと頑張ってもらわんとはいけませんね(笑)。

それと、上町台地というものをこれからも大事にしていってもらいたいです。これまでどおりネットワークを広げながら、足元から安心・安全をつくり上げていく。水もあり、お寺や神社もあり、台地が文化を育て、人、土、野菜も育てている。それらをこれからも大切にしていってもらいたいです。

鈴木 上町台地で生まれ育った人たちに、いつか帰ってきてもらいたいという願いもあります。

森下 よそから来た人でも、上町台地に足を降ろしたうえで、まちのことを考えてもらえば良いでしょう。よそから来る人はどこに住んでも、その地に足をちゃんと降ろす。根無し草ではあきません。そして、そういう人もガツと飲み込むような力を上町台地が持っていれば、大丈夫ですよ。





熊野街道沿いの古い長屋を再生した店内で

Story 5 グループトーク “避難所”ウォッチング

日常から積み重ねていく、身近な地域での防災・減災

やってみる、動いてみることから見える防災・減災

吉見 これまで防災関係はちょっと堅苦しい感じでしたが、それがU-CoRoでの展示「“避難所”ウォッチング」というタイトルで軽やかになったと思います。北大江地区（中央区）でも地元2高校で、避難所見学会をはじめていました。避難所内では不備もありましたが、翌年には学校側が改善してくれたり、住民も一緒に確認しないと進まないことです。災害時に避難所で気づいてからでは遅すぎます。たかが避難所見学会ですが、穴を見つけて手直ししていくために



北大江地区まちづくり実行委員会が主体となって実施された避難所見学会（2010年7月、府立大手前高校を訪問）

開催日 2012年10月16日（火）

開催場所 縁（長屋再生 釜戸ご飯の店）

語り手

浦野院次さん（桃園連合振興町会会長）

小西睦夫さん（東中川連合振興町会副会長）

吉見孝信さん（北大江地区まちづくり実行委員会事務局長）



NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション12 「上町台地 もしも・いつもの“避難所”ウォッチング」の案内フライヤー

も、何度も積み重ねていく必要があります。

また、学校が避難所の場合、人事異動で対応が変わったり、関係を築き直さなければならなかったり、学校と消防署、府立高校と市といった縦割りの弊害も出てきます。防災セミナーなどでは、専門家が「心構えが大事」とか言いますが、それだけではどうしようもありません。

地域のなかでも考えて、動いている人はわずかです。防災は口で言っているだけではダメで、誰かが動きはじめないとけません。そうした人たちを探し出していくことも大切で、北大江地区では動員を掛けずに、動ける人に動いてもらう。それが基本です。

浦野 桃園連合振興町会（中央区）では、防災訓練に続いて、避難所開設訓練も行いました。実施までに何回も打ち合わせを重ねたのですが、本番ではとても混乱しまして、良い勉強になりました。

次の防災訓練では、町会単位での安否確認訓練も実施します。こうした取り組みを重ねるにつれ、日頃から備えておくことは大事だなあと実感してきます。先日「命のカプセル」（持病や薬などの情報を書いておく）を配っていたことで、高齢者夫婦の命を助けることができました。

取り組みを重ねていくには組織づくりも大事ですし、そのためには人の確保も大事です。

防災訓練での炊き出しでは、長屋の廃材などを使って、火をおこすことも考えています。

小西 東中川連合振興町会（生野区）では、3.11直後の昨年3月25日に、2回目の避難所開設訓練を行いました。地域内に福祉避難所機能を設けたのですが、それを試してみる意味もありました。

避難所開設訓練も防災マップづくりも、生野区内では真っ先に取り組んできましたが、開設訓練では「500人も集まれば」と

思っていたところ、連町内13,000人のうち1,200人も集まってくださって「これはいける」と（笑）。

単なる防災ではなく、イベントとしての防災、ナマで動いてみる防災というように、いろんな形を試しています。アイデアは行政から出してもらっていますが、そのまま持ち込んでもらうのではなくて、地域住民と話し合ってもらなかで提案してもらうように心掛けています。

福祉避難所の訓練では、避難してもらうことで、その存在をアピールする意味もあります。誘導や対応は、町会のもう一つ下の活動単位の「班」に任せました。そうすると班長さんの力量も見えてきます。参加者は最初より多い1,500人でした。

課題は役員の高齢化です。訓練の打ち合わせ時には、企業や学校の人たちも加わりますから、訓練の実施日も大勢ではなかなか決まりませんし、決まっても細かいことが伝わりにくい。そういう問題点もあります。

3.11東日本大震災の教訓などを、大阪で活かすには

小西 3.11は今年の訓練の直前でしたので、みんなの意識は確実に訓練へ向いたと思います。地域の企業もより協力的になりました。

浦野 うちでは11月の防災訓練に続いて、12月には子ども向けの防災マップづくりを行う予定ですが、3.11後は子どもたちの関心も高まっていると感じています。

小西 防災をやるにしても、地域がこれからどうなっていくのか。再編の動きもありますしね。



桃園公園で実施された桃園連合町会の自主防災訓練の様子（2010年11月）。この後2011年11月には避難所に指定されている市立南高校で避難所開設訓練を実施

吉見 いろんな団体が地域にはありますが、人が頼りないとうとうどうしようもありません。ウチでは平日昼間に災害が起きたときに、地元企業を頼ることができるのか、それも課題です。関心が高いうちに、何とかしたいですね。

浦野 一口に連合振興町会といっても、防災訓練すらできないようなところもありますし、個々の地域がどうなのかを知っておかないと、防災の取り組みもむずかしいと思いますよ。

吉見 消防や区役所に頼りっぱなしでもだめですしね。たとえば、避難所の消防ポンプは何年も壊れたまま、そのことを知らないままでしたし。

地域外の専門家や災害関係のNPOが地域の力になるには

小西 地域外の人たちとの連携は一応、やっていますが、ウチの地域は下町ですし、高齢化が進んでいますので、そんななかでどうやって防災に取り組んでいますか。それがもっと大きな課題ですね。それと、社会のなかでの孤独化も大きな課題です。次の世代をどう育てるか。これも大切です。地域の現場でコツコツと動いてくれる人たちは、損得勘定で動いていません。人の問題は重要ですが、損得勘定でない人たちがやっていかないと、何事もお粗末になってしまいます。

それと、私たちは防災だけではなく、地域のなかでいろんなことをやっていかないといけません。孤独死



浦野院次さん

や児童虐待の問題。ひたたくり対策に月2回夜回りをはじめていますが、たった月2回でも結構効果が上がっています。

浦野 ウチでも毎月最終土曜の夜に20～30人は集まって、夜回りを続けています。

小西 ウチの夜回りでは200～300人ほど集まってくれています。

浦野 それはものすごい人数ですね。

吉見 専門家が減災ゲーム・クロスロードを持ち込んだとき、全員意見が違ったり、「みんな同じやろ」と思っていたら、自分一人だけ違っていたりして面白かったです。パターン化した訓練だけでなく、「えっ!」と思えるようなことも試していかないといけません。

それと、いろんな決め事で固め過ぎたら、イザというときに動けなくなります。「そんなときはそんなとき」という感覚や、決め事が「上手くいかないかも」という意識も大切です。



小西陸夫さん



「上町台地 もしも・いつもの“避難所”ウォッチング」展では、東中川地区での避難所開設訓練など、上町台地の様々な地域での実践を紹介(2010年9月13日～2011年1月28日)

それと地域外から来る人たちは注文ばかりで、住民を下働き程度にしか思わず、自分たちは動かない人が多いです。まあ、何十年と住んでいても動かない人もいますが(苦笑)。

U-CoRoが地域の防災・減災に役立つために

吉見 U-CoRoは下積み……本来は区役所などがやるべき、地域のなかの空いたすき間をくつつける役回りをやってくれています。下積み仕事は、利益を求めず成果にもしないということが大事なので、それを続けてもらいたいです。

小西 こういうことを一企業がしているということに、驚いています。

浦野 U-CoRoはもっとPRしたほうが良いのでは。こういうことがあまり知られていないのはもったいない。

小西 生野区の製粉業者さんが、災害時に小麦粉の供出を申し出て下さいました。そういう企業が地域にあると、心強いです。ところでマンションの町会加入はどうですか。

吉見 ウチの地域では、マンションの販売契約時に、町会費を納める旨、明記して、購入者に説明するように求めています。でも、賃貸マンションなどはむずかしいですね。



吉見孝信さん

「上町台地 もしも・いつもの“避難所”ウォッチング」展の関連イベントとして上町台地の様々な地域から実践者を招いて減災トーク・セッションを実施(2011年1月18日開催、上町ココロ新聞)

浦野 ウチの地域でも賃貸マンション、ワンルーム・マンションは町会に入らないですね。ですが、災害が起きたときに、「町会に入っていないから」とは言えないですし。

吉見 助けを求めてきたら、動かないわけにはいきません。だからこそ、町会には入っておいてもらいたいです。

小西 町会には入らないし、災害時には自宅に留まっているからといって、むげにはできませんしね。

“その日”に向けた取り組みの積み重ね

吉見 今後も防災と生活安全ですね。警察などとの協力関係をこれからもしっかりと保っていかないといけません。「つながり」とか言いますが、これまではパフォーマンスでしかなかったことが多いです。それではイザというときに何の役にも立ちませんから。

浦野 ウチでは「安心・安全のまちづくり」をテーマに掲げています。それを目指したことをやっていく。それがこれからのことですね。それと、若い人たちを絡めたり、高齢者に喜んでもらえるような行事もやっていきたいです。

小西 私たちも何だかんだ言って頭は固い(苦笑)。でも役所の人たちは賢いけれども、責任は取らない。しょうがないから、私たちが賢い人たちの知識を理解して、それを実行して、責任も取っていかないといけません。それが私たちの役割ですし、それを続けていくことが地域にとって大切です。



Story 6 グループトーク
減災まちづくりの可能性

NEXT21・1階のU-CoRo(上町台地コミュニケーション・ルーム)内で



まちづくりの立ち位置から進める、 上町台地での防災・減災の可能性

開催日 2012年10月3日(水)
開催場所 U-CoRo (NEXT21・1階)

語り手
菅磨志保さん(関西大学社会安全学部准教授)
浦野愛さん(特活)レスキューストックヤード常務理事)



U-CoRoの第3回展示「いのちをまもる智慧」のパネルなどを上町台地4カ所で巡回展示した「減災キャラバンon上町台地」(RSYが主催し地域の関係者等が共催)。各会場ではゲストを招いたりリレートークを実施(写真は第4回「路地の覚悟」(2009年2月27日)の様子。司会はRSY代表の栗田暢之さん。会場にはU-CoRo展示のために作成された上町台地の立体模型も登場)

まちのことを考える「下地」に 防災・減災を投げ込む

菅 U-CoRo^{ひとり}独案内を並べて振り返ると、U-CoRoはいろんなことをされてきたんだと思います。

特に第12回の「もしも・いつもの「避難所」ウォッチング」の展示は印象的でした。実際に地域の防災力を向上させたと思います。また展示の制作過程で、人をつなげ、活動を促進させる仕掛けを、かなり考えていたように思います。

浦野 上町台地の方々と、私が所属する(特活)レスキューストックヤード(RSY)で共催した「減災キャラ

バンon上町台地」では展示会場が4カ所もあって、それがお寺や神社だったり(笑)、とても驚いた記憶があります。普通は公民館など公的なところでやるのに「何でこんなことができるんだろう？」と不思議に思いましたが、今日、まちを案内してもらって、それが少し分かったような気がします。

菅 減災キャラバンでは展示のテーマも会場ごとに変えていて、「まちづくりの文脈で減災をやると、こうなるのか」と思いました。

浦野 上町台地には、まちのことを考えていくという「下地」があって、減災キャラバンは、その「下地」に防災を投げ込んだらどうなるだろうという視点があった。それは私も興味が湧く部分。普段、まちづくりをやっている人たちが、日常のなかでどう防災をやるのか？ 私たちが「つながり」というと、イザというときに身を守るためののですが、まちづくりの人の「つながり」は何のためかとか、知りたいことがたくさんあります。

菅 U-CoRoは、防災・減災というテーマを、地域事情に合わせて練り直し、見せてくれたように思います。

行政職員の災害対応研修ツールだったクロスロードを、U-CoRoは地域へ持ち込んだのですが、コアタウンではPTAの取り組み課題の議論になり、練ではなにわ伝統野菜のプロジェクトでつながった人たちが参加したり。他の活動との組み合わせ効果も考えていたと思います。地域でやると、実在の人名・地名などの固有名詞が出てきて、実際の災害時、これらをど



「減災キャラバンon上町台地」の様子をドキュメントした、U-CoRoの第9回展示案内フライヤー。浦野さんが所属するRSYと菅さんが当時所属していた大阪大学コミュニケーションデザイン・センターとの共催で開催

う守るという対策の話につながるのも興味深かった。
浦野 コミュニティ・センターなどでやると、来人も大体決まってしまう。それが会場を工夫すると、普段、防災の集まりに来ない人たちがやってくる可能性が出てきますよね。

災害を経験していない人へ 伝わっていくには

菅 地図を使ったり、地形模型もつくったり。視覚に訴える手法の効果を感じました。人のつながりなど見えにくいものも、可視化する工夫をしている。

浦野 「連動」ってよく言いますが、実際にはとてもむずかしい。防災・減災を普段のまちづくりのなかに連動させていくのも、普通はむずかしい。U-CoRoが地域に持ち込んでいる活動を見ていると、ルーティン・ワーク的なもの、特別なことでなく、簡単にできることをやっているように思えます。防災活動をやっている者は、意外とそういうものを地域でやれていないように思います。

防災運動会とか炊き出し交流会など、私たちがお手伝いして一回やってみたら、次からは自分たちだけでもできるメニューも、あることはあります。そういうメニューを集めて、レシピ集のようなものをつくることも大事かもしれません。

菅 U-CoRoでは、ルーティン・ワークができていない地域に、話を持っていっているのではないかな。だから、すぐに反応があるのかも。

避難所展示のときのフォーラムもとても面白かった。地域で防災を担っている人たちの体験談は面白く、大爆笑の連続でした。さらにスゴいなあと思った



コリアNGOセンターの人たちと減災ゲーム「クロスロード」を実施(2008年7月26日)。上町台地の計5カ所でクロスロードを行い、その結果をU-CoRoの第6回展示で紹介した



菅磨志保さん

のは、これを機に、避難所見学会や防災訓練をはじめた地域が出てきたこと。小さな場を重ねる大切さに気づかされました。でも、そういう動く地域を探してくる力も大切なのだらうと感じています。

場所を変えると、いつもと違う人たちが来るかも、という話がありましたが、減災キャラバンの高津宮でのトークのときに、氏子さんたちが来ていたことが印象深かったですね。各場所の特性を上手く絡めていたと思います。

災害を経験していない人にどう伝えていくのか。いろんな挑戦をしてくれていると思います。

都市コミュニティでの 事前の防災・減災のための知恵

菅 同じような価格帯のマンションには、同じような層の人が集まってくるはず。そんな地域で防災活動を

する際は、共通する課題やテーマ、例えば、子育てに的を絞ってみる手もあるのでは。

浦野 RSYでも高層マンションでの防災訓練に協力したことがあって、上下階を結ぶ避難ハシゴを降りてみたり、隣のバルコニーへ逃げるための簡易壁の見本を蹴り破ってみたり。そういう体験は好評でした。

いろいろ試したなかで、特に面白かったのは「食」をテーマにしたときですね。岐阜県の坂祝町^{さかほぎ}では、米1合と冷蔵庫のなかにある一品を持ち寄るというスタイルを採りました。持ち寄るだけなので準備も簡単。それに持ち寄るだけで、一人ひとりに参加する感が生まれてくる。外国籍の住民の方も多いのですが、言葉を気にしなくてもすみますし。しゃべらなくても「いる」というだけでいいんです。

3.11以降のそれぞれの活動から 問われること

浦野 RSYの活動も、そのほとんどが日常のつながりがもとになっています。上町台地や宮城県七ヶ浜町とのつながりもそう。3.11以降やっていることは、それ以前に出会っていなかったら、どれもできていない。

上町台地の取り組みを見て、防災とまちづくりは分野が違って分かってもらえるんだと思いました。そういう関係をどれだけ日常からつくっていきけるか。そして、持っている力を、イザというときにどう見つけて、引き出せるか。それに掛かってくる気がします。

被災地支援も一緒に、地元の人たちに普段から「このまちに住んで良かった」と思ってもらえるように、もう一度していくんですね。

RSYはこれまで緊急支援が中心でした。それが七ヶ浜町では長期支援が変わって、これからは日常の取り組みになっていく。そのとき、どうエンパワーメントしていくのか。こういう長期支援は初めて。だから、住民とどう接していけばよいのか、どう付き合っていけばよいのか、手探りが続いています。

それと、これまでに起きた問題と起きたことの整理。それをどう説明していくのか、考えていくことがこれからの課題のように思います。

菅 そこで何があったのか。出来事の過程を整理し、記録しておくことは重要だと思います。以前、浦野さんは、能登半島沖地震の被災地・穴水町でも、住民を集めてその意見を引き出ししながら、整理されていたね。

浦野 七ヶ浜町では、きずな工房、仮設商店街、ボランティア・バスなどをさせてもらって、それぞれに目標もあって。それらをどう整理して、考えていくのか。そして、それらを被災地に行ったことのない人、普通のオバチャンにも伝わるようにしないといけないと感じました。

菅 伝えたい層と、問題やその背景を共有し合えるか。その上でどう伝えるか。同じ話でも、相手によって伝え方を変えていかなければいけない。

また、東北の問題を「日本社会全体の問題」として捉え直すことも必要だと思います。実際、東北から関西にも大勢の人が避難している。でもその姿が見えにくく、支援も行き届いていない。

浦野 RSYの代表の栗田とも話しているのですが、普段は被災者に寄り添うことを大切にすべきところ、



浦野愛さん

寄り添うだけではダメな問題もあると。一緒に訴えていかないといけないと。

まちづくりと防災・減災の リレーを続けてほしい

菅 上町台地で、まちづくりから防災・減災にリレーしたもの、防災・減災からリレーしたもの、その活動のなかから、残していくものがあるはず。それを続けていくことが大事なのではないでしょうか。

私が学ばせてもらったことの一つは、あるテーマを地域へ持ち込む過程を、丁寧に進めていく大切さ。これについては、どこにも書かれていませんけれども。

浦野 まちづくりのなかに防災・減災を自然に絡めさせていく方法を教えてほしい。U-CoRoがやっていることは、大阪大学の渥美先生の言う「防災と言わない防災」とまさに合致していると思います。



「減災キャラバン」のリレートーク第2回「対話の覚悟」(2009年2月13日)は直木三十五記念館で開催



お屋敷再生複合施設「練」での「減災キャラバン」展示の様子(2009年2月22～28日)



「減災キャラバン」のリレートーク第3回「避難所の覚悟」(2009年2月20日)は高津宮で開催



「減災キャラバン」から1年後、U-CoRoでのドキュメント展示の関連イベントとして開催された「減災Cafe in 上町台地」(2010年1月26日)



RSYが運営する宮城県の七ヶ浜町にある「きずな館」は、被災地を長期支援するための拠点となっている

エネルギー・文化研究所のある大阪ガス本社ビルにて



上町台地で減災をつなぐ

開催日 2012年11月13日(火)

開催場所 大阪ガス本社ビル

語り手

渥美公秀さん

(大阪大学大学院人間科学研究科教授/
特活)日本災害救援ボランティアネットワーク理事長)

矢守克也さん

(京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授・センター長)

U-CoRo、上町台地が重ねてきた「つながりの防災」

渥美 U-CoRoにはフォーラムに出る程度でしたが、実に楽しくやらせてもらいました。展示もそうですが、気軽な雰囲気でしたし。防災・減災関連の展示も3回おきという、良いペースで展開されていたなと思いました。フォーラムでも参加者から良いレスポンスがあったことを覚えています。

展示も、上町台地での災害史とか「よう調べてはるなあ」と思って見ていました。ただ、「ここへ誰が見に来はるんやろう?」ということが気になっていましたね。

矢守 上町台地には地理や歴史に関する事柄がたくさんあり、知識も得られます。それもむずかしいこと

NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション03「いのちをまもる智慧」を伝える 減災に挑む30の風景と上町台地災害史」では、全国の被災地で蓄積されてきた「いのちをまもる智慧」とともに、上町台地の災害リスクなどを紹介(2007年9月3日~2008年1月18日)



ばかりではなく、楽しそうな伝統野菜などもあって、誰でも上町台地を語ることができる。ここでの取り組みを見て、自分たちの地域と生活全体を好きになること、そこからしか防災ははじまらないのではと、より強く思うようになりました。

南海トラフの巨大地震の津波予想で、巨大な津波が10分足らずで襲来するかもしれないと言われた、高知県のある集落に関わっています。そこで、個別避難訓練というものに取り組んでいます。家などで普段通りに過ごしていて、合図をしてから、実際に時間を計りながら、できるだけ早く避難を試みるというもので、近所の小学生がお年寄りと一緒に逃げながら、その様子取材することも採り入れました。

訓練の参加者のなかに、80歳代のおばあさんがいます。早く逃げてもらうための方法を考えるためには、彼女のことをよく知っておかないとならない。そこで、子どもたちは何度も通いながら、彼女は近くの浜辺が大好きで、そこで獲れる貝殻で造り細工をしていることなどを知ります。

そして個別避難訓練の日を迎えるのですが、お年寄りなのでやはり逃げるのに時間が掛かります。おばあさんは子どもたちに「もう、私は逃げなくてもいい」と言います。でも、彼女のことを知ることで、とても気になりだした子どもたちは「絶対、逃げてね」と言います。すると、あきらめていたおばあさんに頑張ろうという気持ちが芽生えてきます。

一人ひとりのことを知って、それから「頑張ろうね」と言う。いきなり「津波の時には逃げましょう」と言うのでは効果がない。防災の意味もないなと実感しま



した。そのことを思い出しながら、上町台地での取り組みを振り返らせてもらおうと、ここは「人を知り、地域を知る」という姿勢において、先んじているなあと思いました。

渥美 今話を伺っていて思ったのですが、U-CoRoでは防災・減災の展示は4回だけではなく、実は15回全部が減災なんですよ。例えば、「上町台地で読みたい本」展も減災とは関係ないようできて、本を通じてまちを知ることにもなりますし、伝統野菜もそうですね。そうしてまちを知れば、それが防災・減災になる。知らない者同士が本や越瓜しろうりを通じてつながることもできる。多様な関心を持つ人たちをそれぞれの関心で引っかけて、U-CoRoでつなげている。そうしたことを続けてきていることが、防災・減災なのだと、改めて認識しました。今後もこれだけでよいのかというと、また別ですが。

矢守 今話の「つながり」というキーワードも大切ですね。私が知っているだけでも、上町台地と岩手県野田村、上町台地の人と東北の人、減災ゲーム・クロスロードの利用者の方と上町台地などといった、多様なつながりがあります。

そのクロスロードに関連した話ですが、先ほどと同じ高知県の黒潮町の人々がクロスロードの研修に来ました。研修の受講生が集まる催し、といってもほとんど飲み会という集まり(笑)でした。その席で、その人

は仙台や神戸の人たちと出会います。そして3.11を迎えて、黒潮町の人たちは



「減災ゲームで気づく 上町台地の暮らしいろいろ」展の関連イベントとして、ゲーム開発者のお一人、矢守克也さんをお招きして、「減災Cafe in 上町台地」を開催(2008年12月8日開催、上町ココロ新聞)

NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション06「減災ゲームで気づく 上町台地の暮らしいろいろ」では、上町台地界隈の5会場で実施した減災ゲーム・クロスロードの経過と結果を再現(2008年9月16日~2009年1月23日)



矢守克也さん

ところなどがよく似ています。きっと、U-CoRoを入り口に共通点のある人たちと出会わせてもらっているのだらうなあと思います。

その一方、よそから上町台地へやってきた人たち、都心居住に憧れている人たちなどとは出会っていません。高校も多いところですが、高校生とも出会っていませんね。次はそういうところへもアプローチしてはどうでしょうか。

矢守 ある地域で教育に防災を取り込んでいこうとしていますが、いつも決まって「ではまず、先生の研修から」となります(笑)。先生が何もかも知らなくていい。地域にいらっしゃる詳しい方と協力・連携する方が簡単だし効果的です。

それと、学校との関係をいかに持続させていくのかということも、むずかしい問題ですね。私もいろいろ試しているのですが、「モノを置く」というのは有効な一手かと思っています。例えば、今、ある2つの小学校に地震計を置いてもらって、6年生に観測と地震計のお世話をしてもらっています。熱心な先生の異動で、つながりが切れてしまうことが多いですが、モノがあると続きやすいかもしれません。すでにあるモノは捨てにくいです(笑)。1校は1度、もう1校は2度、担当の先生が異動しましたが、両校とも地震計は置かれていますし、つながりも続いています。

渥美 うん。今のようなエエ話を集めて紹介していくことも一手やなあ、話を聞きながら思いました。災害救援の仲間たちとつくった『いのちをまもる智恵』もそうでしたが、この場合は誰でも簡単にできそうな



NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション09「減災キャラバンon上町台地」の道程から」展の4会場を巡った『いのちをまもる智恵』の展示とリレートークの様相を紹介(2009年9月7日～2010年1月29日)

ことを紹介することで、実際にやってもらうように仕掛けていく。

矢守 上町台地で超高層マンションと向き合っている、地元の人たちの話を伺って、井戸を掘ったり、マンション住民で特技や資格を持つ人たちを、町内の「チャンピオン」として登録して、防災に役立っている加古川市内のマンションを思い出しました。上町台地のマンションでも、防災を考えはじめているところはあるかもしれません。

U-CoRoの次の展開では、上町台地のマンションとつながり、そのマンションを地元とつなげていく。そうした取り組みをしていけないでしょうか。

渥美 マンションの防災にも関わる機会がありますが、簡単ではないでしょうね。おカネで解決できるのなら、防災もおカネで何とかしたいという人もいるでしょうし。

つながりということも、こちらが「つなげますよ」と言っても、「うっとうしい」と思う人はいるでしょう。そこをどうクリアしていくか。

矢守 上野千鶴子さんの本に『家族を容れるハコ、家族を超えるハコ』というのがあります。地域という単位で考えていくと、U-CoRoが上町台地を凝縮したハコになるかもしれませんね。そして「地域を超えるハコ」になっていく。こういう取り組みでは、とかく「地域を容れるハコ」で考えがちですが、それを変えていく。

U-CoRoでの減災のこれから

渥美 これまで15回もやってきて、そして毎回、関



「減災キャラバンon上町台地」の道程から」展のクロージングイベントに、渥美公秀さんと矢守克也さん、(特活)レスキューストックヤード代表の栗田暢之さんがゲストで登場し、地域を超えた「減災キャラバン」の上町台地での第一歩をふり返りました(2010年1月26日開催、上町コロコロ新聞)

係者が一堂に会する場を持ってきた。これはスゴイことですね。

ただ、欲を言えば、いつでも集まれる居場所があると良いですね。それも飲めるのであれば、なおうれしい(笑)。そういう場があれば、上町台地の人たちがいつでも集まれて、直接出会えます。小料理屋みたいな場はU-CoRoにつくれませんか(笑)。

でも「飲みニュケーションが大事ですよ」とか言いながら、自分の住んでいるところにはそういう場がない(笑)。野田村でもそういう場を造りたいのですが、なかなか実現しません。

矢守 そういう場が出来たとしても、今の日本社会では立ち寄りヒマもないですよ。そういう点では地域とのつながりも同じかもしれませんね。何も自治会活動などだけが地域活動ではなくて、住んでいるところで家族と過ごす。公園で遊んだり、キャッチボールをしたり、近所のお店へ行く。それも広い意味での地域活動だと思うのですが、その時間すらない。まちづくりやコミュニティを考えていくためにも、地域で過ごせる時間をもっと増やす方策を考えていく必要もありますね。

渥美 U-CoRoには私たちの足らざる部分も含めて、これからもつながりを模索していってもらえればと思います。



渥美公秀さん



Story 8 グループトーク
上町台地と言葉の力

塙さんが主宰する「空堀ことば塾」の土間の壁は子どもたちのためにと寄贈された本がとり囲む

言葉を育み、言葉が紡ぐ上町台地の時空間

開催日 2012年10月21日(日)

開催場所 空堀ことば塾

語り手

秋田光彦さん(大蓮寺住職・應典院代表・パドマ幼稚園園長)

塙狼星さん(空堀ことば塾主宰)

上田假奈代さん(特活こえとことばとこころの部屋代表理事)



NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション07
「春の日 上町台地で読みたい本」では、52人の方に好きな本とその理由、その本を読みたい上町台地の場所を伺い展示しました

U-CoRoを通してふりかえる言葉の力

上田 「上町台地で読みたい本」展は面白かったです。関連してまち歩きをしながら朗読するという、今思えば大変なことをさせられていたなあ(笑)。でも、あの企画は私もやってみたいですね。朗読も「この本がイイ!」という人にしてもらうのが良いと思います。好きな本を紹介するという事は、自分自身の頭のなかを開けるというか紹介することでもあると思います。それは、とっても勇気が要ることかもしれませんが、互いに頭のなかを開けて、見せ合えば、豊かな時間をシェアすることにつながると思います。

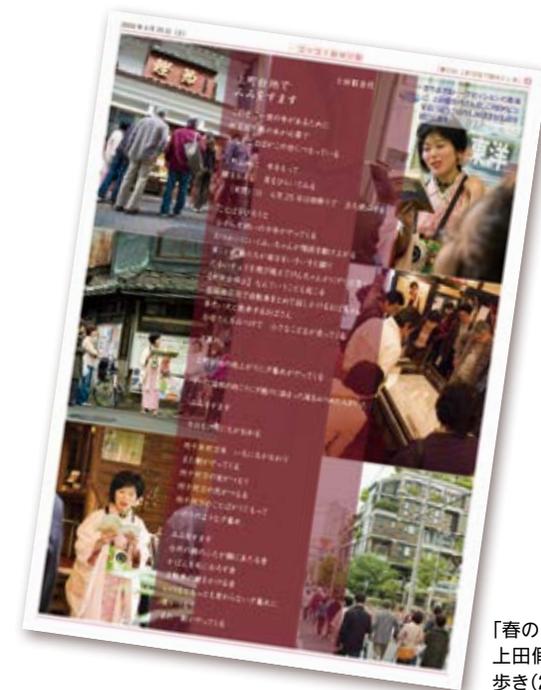
それと、普通は屋内でやることを、屋外に出て、好きな場所に実際立って紹介するというスゴさ。それもあの企画の良さでした。ぜひ継続してもらいたいですね。
秋田 上町台地の魅力は歴史とか伝統とかで語られがちですが、そう語れることで逆に思考停止を招いたり、歴史などに関心のない若い世代が入られなくなる恐れもあります。歴史や伝統は大事なことです、それを今に反映させないと意味を持たない。

U-CoRoは上町台地で積み上げられてきたことを再構築して、改めて提示し直す取り組みをしてきたのではないかと考えています。本の展示に限りませんが、単に歴史や伝統に留まらない、上町台地の別の面をにじみ出させて、我々に見せてくれています。

塙 上田さんが言われたように、本はかなり個人的なものですし、それを空間で味わうと世界がまた広がるかもしれません。子どもたちとやってみたいですね。

今はメディアが多すぎて、情報が溢れる一方、本を読まない子どもが増えています。この塾にも本棚があつて、寄贈いただいた本がたくさんあるのですが、子どもたちが手に取るのは、マンガか絵本風なものほとんどです。それらが決して悪い本とは言いませんが、本らしい本、分厚い本などは手に取りません。

小学校高学年から中学生に掛けての多感な頃にこ



「春の日 上町台地で読みたい本」展に関連して、詩人の上田假奈代さんとともにお気に入りの本を手をもち歩き(2004年4月25日、上町コロコロ新聞)

そ、本に出会ってほしいです。それを何とか、「本は大事なんだよ」といったお説教風にならないように伝えたいのですが。

秋田 音楽はどちらかというと受け身のものですよね。私がやっていた映画も同じ。それはそれで良いとは思いますが、やはり、本は能動的なものです。音楽は聞き流せても、本は一行飛ばすと、何が何やら分からなくなってしまう。読み手の主体性が問われるものです。

上町台地の資源はいろいろありますが、私が一番大事だと思う資源は「とき」です。まちの時間。生活や暮らしのなかで連綿と積み重ねられてきた時間。それが今も流れている。本展のような企画を通じて、まちの「とき」から本へ導いていくようなこともできるかもしれません。

声に出すことで広がる、つながる

塙 かつて私が研究で訪れていたアフリカでは、一人ひとりの声の違いに、強烈な存在感と威厳が感じられました。あるとき「オマエの靴をくれ!」と言われたのですが、迫力があって言い返せない(笑)。言葉の力を思い知らされた出来事でした。

そう思うと、大阪とアフリカは近いような気がします。大阪の人たちも声に力がある人、自分を信じている人が多いのかもしれないね。その背景には、時間が積み重ねてきたものを発見できる場、例えば、この建物や路地のような場の力というものもあるように思います。

上田さんが釜ヶ崎でおじさんたちとカルタをつづっている話をされていたが、その話を聞いてスゴイと思いました。大変な経験をしてきたオッチャンの言葉。そこへ子どもたちを放り込んでみると、スゴイことが起きるかもしれません。

秋田 上田さんにとって、詩を書くことと朗読することの違いは何ですか？

上田 私の場合は、詩をつくる時も、こころのなかで声に出しながらつくっていくのですが、声がリズムを取るということがありますね。うまく表現できませんが、自分のなかにイメージをつくって、それを呼吸に合わせていくような。私は呼吸が下手なのですが、声を出すと落ち着くというか、自分のなかにブレない軸が出来るような気がします。空気の振動が心地よいですね。

秋田 僧侶ですのでお経を読むのですが、読経とはまさに声に出すことです。聞いた話ですと、昔の日本は音読が中心で、黙読の習慣は大正時代頃から広まったそうです。

声に出すということで、自身のなかにあったものを外部化できる。声を出している自分とそれを聞いている他者という関係になって、初めて世界が広がるのではないのでしょうか。そういう意味では「声の届く範囲」という表現は、言い得ているのかもしれませんがね。コミュニティの範囲とかを表しているのかも。U-CoRoのフォーラムもいつもちょうど良い人数だったのでは。みんなが伝え合える人数とも言えますか。



上田假奈代さん

上田 軍隊は確か、150人くらいが単位だと聞いています。ああいうシステムになると、それくらいの人数が適当なんでしょうか。

堀 アフリカの狩猟採集民のキャンプは大体30～50人程度です。それが円を描いて家を建てていて。彼らは狩猟生活を続けていましたから、狩りのときには互いに声を出して連携する必要があります。ナマ声の届く範囲というのが重要になってきます。

アフリカのある村では本人が死を覚悟、「明日、死ぬ」のだと告げると家族や親戚が集まってきます。本人を囲みながら話をし、亡くなると集まったみんなが声を出して泣き出す。泣き声に送られていく人は幸せだろうなあと思います。日本も昔はそうだったの



NEXT21/U-CoRoウィンドウ・エキジビション15
「U-CoRo人絵巻～上町台地百人一句」の
クロージングイベント
(2012年3月17日開催、上町ココロ新聞)

では。声が響くスペース。それを回復させていけば、人は生きていけるのかもしれませんが。秋田さんが言われた読経も、そういう効果があるのかも。

今求められる、 他者と言葉を紡ぎあう環境

上田 秋田さんのところ、應典院での詩の学校では、人の話を聞いて、それをもとに詩作するというスタイルをよく採っています。そのメソッドを「こころのたねとして」と表現していますが、人の言葉を聴くということも大切なことだと思っています。堀さんが研究されていた人類学などの世界でも、人の話を聞いてまとめていくようなことをされていたのではないのでしょうか。

詩をつくる時も、相手の言葉に自分の気持ちが重なって、なんともジンとする気持ちになります。つくった詩は自分の言葉のような、そうでないような。この手法は私自身も楽しくて、ずっとその形にはまっています(笑)。それを死にゆく人たちとできたらなあと思うことがあります。生きてきたことをちゃんと伝えられて、ちゃんと受け止められたらと。

秋田 地域や在宅で死を迎えるための環境づくりが求められるなか、私は人文学の復権と言いますか、宗教や哲学、芸術の再登場が必要になってくると考えています。人間は、制度やサービスが充実したから、幸せに逝けるわけではない。そのときの共通テーマは、成熟した死生観を受け入れる「祈り」であろうと。

堀 塾では子どもたちと落語も演じていますが、お年寄りに聞いてもらうときに、笑うところではないの

に、羽織を脱ぐだけで笑ったりする人がいます。笑いがズレているのですが、それがお年寄りには楽しいのでしょうか。子どもたちも楽しがっています。ズレていたのに、演じ終えたあとに隣同士で座っていたり。そこには言葉の余韻というようなものがあるように思います。ズレていくことで、素晴らしいものを互いにもらい合っているような。とても不思議なんです(笑)。
秋田 それは、言葉があることが前提なのではなく、言葉がこぼれ出てくる環境があるからかもしれませんね。利便性や効率性だけではない、生きることを、他者と紡いでいくことができる時間や場が、上町台地にはまだあるのだと信じています。

つぎに重ねていく言葉の時空間

上田 U-CoRoは建物自体に力があるように感じています。あの建物に上町台地の案内所、展示があるというのが有効なのだと思います。

秋田 5年もやっていると、特定の人たちの寄合感が生まれているのではないのでしょうか。高校生とかアーティストとか、異物といいますが、そういうものを、抱え込むことも大事だと思います。

上田 集まりも工夫していくと、違った人たちが来るかも。鍋をしながらやるとか(笑)。

堀 本展でも中高生版をやってみるのはどうでしょうか。マンガもOKにしてあげると、参加しやすくなると思います。

秋田 今度は、ことば塾に子どもたちがいるときに、また来たいですね。

堀 ぜひお越しください。カルタづくりでは上田さんとも一緒にしたいですし。

上田 このあいだもオッチャンたちとカルタづくりをしたら面白かったですよ。ワークショップをされるときには、ぜひ声を掛けてくださいね。いつでも来ますから。



秋田光彦さん



堀狼星さん